

県央・林業部トピックス（4月号）

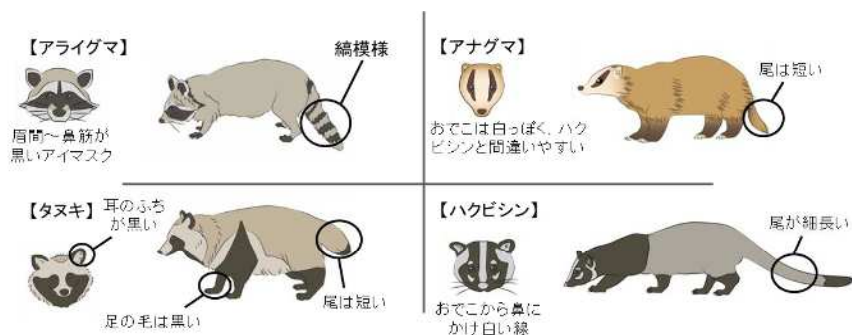
特定外来生物講習会

令和6年4月8日（月）に、邑南町主催の特定外来生物捕獲講習会と有害鳥獣捕獲補助員講習会が行われました。邑南町では狩猟免許をもっていない場合でも、本講習会を受講し捕獲従事者証を受け取れば、特定外来生物であるアライグマとヌートリアに限り捕獲が可能になります。

今年度も鳥獣専門指導員が講師となり、特定外来生物であるアライグマ・ヌートリアの生態と防除対策、鳥獣の捕獲に関する法律について説明がありました。

アライグマは令和3年度以降、羽須美地域を中心に目撃・被害・捕獲が増えている状況で、昨年は町内で4頭の捕獲報告がありました。民家侵入などの生活被害の懸念も多いため、営農者以外の方も受講をされ、メモを取りながら意欲的に講習会へ参加をされていました。

アライグマやヌートリアが増加した地域では農業被害・生活被害・生態系のかく乱など様々な問題が発生しています。従事者となった方たちが防除対策に取り組み、個体数の増加・分布拡大等による被害深刻化の未然防止が期待されます。



アライグマと間違われやすい動物（講習会スライド）



講習会の状況



家の柱に登るアライグマ（講習会スライド）

県央・林業部トピックス（6月号）

林業学習実施中!(県立島根中央高等学校)

島根県では、年間80人以上の新規林業就業者確保を目標に、高校での林業学習を支援しています。

令和6年6月10日(月)と6月17日(月)に県立島根中央高等学校の2年生20名が林業学習講座を受講しました。

6月10日は地元、川本町で活動されている篤林家の山林にお邪魔し、全国でも生産が限られている絞り丸太の生産方法や、原木しいたけの生産について学習しました。説明を受けた後、ご自宅の床柱として利用されている絞り丸太を見学をしましたが、普段見かける木材とは違うごつごつとした肌のスギに触れ、生徒たちも興味津々でした。

6月17日には農林大学校へ行き学習を行いました。森林・林業についての講義と農林大学校についての説明を受けた後、グラップル等の高性能林業機械の操作体験や、チェーンソーによる玉切り体験、VRやドローンといった最新の機器を使用した森林施業の体験を通し、林業への理解を深めました。

これからも、高校生に林業の魅力を感じてもらえるような講義内容とするべく、林業学習の支援を行っていきたいと思います。



絞り丸太についての説明



原木しいたけ生産についての説明



グラップルの操作体験



VRを使った伐倒体験

県央・林業部トピックス（7月号）

ミニアグリミーティングでチェーンソーのVR体験を行いました

令和6年7月4日・5日にJAしまね島根おおち地区本部においてミニアグリミーティングが開催されました。会場では様々なイベントやブースが出店されていましたが、当事務所からは近年鳥獣害対策のため自宅敷地内の放任果樹を自分で伐採する農家が増えている現状を踏まえ、VRシミュレーターを使用したチェーンソーの操作体験を実施しました。

このVRシミュレーターでは、チェーンソー使用時の災害事例を体験するモードとフリーで伐倒を行えるモードがあり、これらを用いて安全な伐木作業について理解を深めてもらいました。災害事例モードの体験者からは、「目の前に木が倒れてきてとても迫力があつた。」と高評価をいただきました。

4日の午前中のみという短い時間でしたが、チェーンソーを普段使っている方から全く触ったことがない方まで、安全なチェーンソーの扱い方について学んでいただけたのではないかと思います。



↑ミニアグリミーティングの様子↑



シミュレーターの映像

※プロジェクターに映した際の画像のため薄いです

邑南町立石見中学校見学会

邑南町教育委員会が、老朽化のため令和4年から改築工事を進めていた邑南町立石見中学校の新校舎が完成し、この度竣工式が6月に開催されました。

こののち、同町教育委員会のご厚意により、西部県民センター県央事務所の主催で、7月19日に見学会が、開催されましたので参加しました。

新校舎は、鉄筋・一部木造2階建てで、屋内運動場を含めた延べ床面積は約6千 m^2 です。

木造部分の木材使用量は、全体で約480 m^3 、このうち邑南町産約313 m^3 と、町内産の木材が多く利用されています。町産材は、邑智郡森林組合を含め、町内の林業事業者3社が伐採され、製材は、町内4社の製材工場が担われ、柱、内壁、外壁等に使用されています。

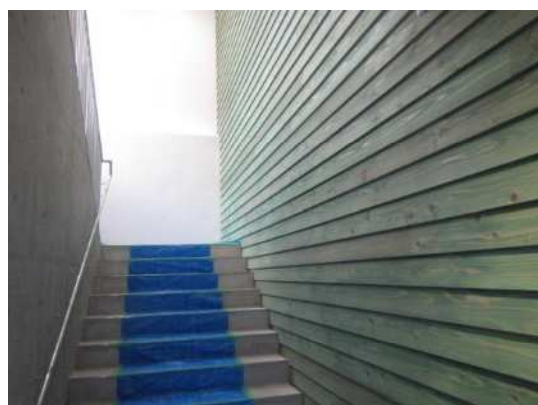
図書ラボなどがある校舎2階の中央部には、町産材の柱が使用され、樹状の柱が並び、並木道が連想され、特に心魅かれる空間でした。



校舎 外観



図書ラボ



内壁



外壁

県央・林業部トピックス（9月号）

遠隔操作式下刈機械（ハイドロマチック・モア）の実演会

令和6年8月26日、大田市三瓶町において、江の川流域林業活性化センターの主催により遠隔操作式下刈機の実演会が開催されました。実演会には県内の森林組合、林業事業者、市町や県の職員など林業関係者52名の参加がありました。

県では原木生産の増産と、伐採跡地の更新に向けた植栽や下刈など保育を確実に行うことで循環型林業の推進を図っているところです。森林作業の現場では、生産性の向上が求められる一方で、夏場の下刈が過酷であることから、下刈作業の負荷軽減や安全性の確保が求められています。下刈においては、従来の人力による刈払機以外にも乗用式下刈機等様々なタイプがでてきていますが、傾斜、林床状況など現場条件によっては操作が困難な機械があります。この度の実演会は、国の支援を得て開発された遠隔操作式下刈機「ハイドロマチック・モア」（筑波重工株式会社製）を用いての開催となりました。

この機械の特徴としては、遠隔操作（リモコン）による高い安全性や、傾斜や根株などの障害物に対応するため車高調整の機能があることです。実演ではゴムクローラーの脱輪や電気系統のトラブルがあり途中中断もありましたが、実際の作業を見ることで、他機種との比較検討ができたのではないのでしょうか。

実演会に引き続き、実証試験（人力による刈払とハイドロチック・モアとの工程比較）が行われており、後日試験結果が提供されることになっています



刈幅の異なる2機を準備



開会・機械説明の状況



林地での実演状況

→35度程度の傾斜の刈払可能

林業学習実施中!(県立矢上高等学校)

島根県では、年間80人以上の新規林業就業者の確保を目標に、高校での林業学習を支援しています。

令和6年9月4日(水)、県立矢上高等学校産業技術科の2年生24名が林業学習講座を受講しました。

午前中は、利用間伐の伐採現場（美郷町）において、伐倒から搬出（伐倒－造材－林内土場からの搬出－運搬）までの一連の流れを見学しました。ヒノキの伐倒作業で、実際に立木が倒れて地響きがあると「お～、すげえ～」という声上がり多くの生徒が驚いている様子でした。また、ハーベスタでの造材、フォワーダ・グラップル付トラックでの運搬という山から市場へ木材が流れる過程はなかなか見学できないものであり貴重な研修となりました。

午後からは、島根県森林組合連合会江の川木材共販市場（邑南町）に移動して、出荷された木材の樹種やせりの方法等について学習しました。土場の見学では、はい積みしてある木材の見方や木の硬さの違いなどを体験しました。

林業講座や体験学習を通して、農林大学校等への進学や林業事業体への就職につながり、将来、島根の林業の担い手として活躍されることを大いに期待しています。



ヒノキの伐倒



フォワーダの作業の様子



木材市場での学習

現地適応化架線研修

令和6年10月22日、大田市三瓶町において現地適応化架線研修を開催しました。

この研修は、架線集材において現場に合わせた工夫ができるよう、小面積皆伐地での効率的かつ、大径木の集材も可能である索張方式としてスラックライン式による架線集材を体験するということを目的として研修会を開催しました。

当日は、あいにくの雨でしたが、管内の林業事業体職員を中心に20名以上の参加がありました。

研修会では、スラックライン式の特徴について簡単に説明を行い、その後、前農林大学校准教授の大塚氏の解説を受けながら、スイングヤーダを用いてスラックライン式での集材を行いました。実際に集材を行う様子を見ていただいたことで、普段用いている集材方式との違いや、スラックライン式のメリット・デメリットがより身近に感じられたのではないかと思います。

県内の架線集材の現状としては、ランニングスカイライン方式や単線地曳での集材がほとんどなので、今回の研修会をきっかけとして、それぞれの現場にあった集材方法を検討していただければ幸いです。



研修会当日の様子

旧三江線鉄道林森林活用実証実験報道公開

令和6年11月29日邑智郡美郷町乙原地内の鉄道林(※)において、旧三江線の線路敷を利用した木材搬出作業が報道関係者に公開されました。

これは美郷町とJR西日本が連携し、旧三江線森林再生実証実験として行われるもので、報道機関・実証実験関係者など25名程度の参加がありました。

この取組は、6年前に廃線となった旧三江線の沿線にある鉄道林を利用・再生し、森林の持つ多面的機能を高度に発揮させ、美郷町の「美郷バレー構想」にある産官学民が一体となり、里山における鳥獣対策、交流の場として活用するものです。

今回は、鉄道林から伐採された木を丸太に加工→丸太を積んだ運搬車（フォワーダ）が線路敷を走行→運搬された丸太を道路近くでトラックに積替→出荷先に向かう、といった一連の作業を見学しました。その後、乙原集会所で、意見交換が行われましたが、線路敷を使用した木材搬出は全国初とのことでした。

丸太を積んだ運搬車（フォワーダ）はマクラギが重量を支持することにより沈み込むことなく、線路敷が木材の運搬路として有効に活用できることが明らかになりました。

今後は、伐採跡地に植栽することで森林を再生するとともに、他の鉄道林や民有林でも線路敷を利用した森林の活用が可能かどうか検討しながらこの取組を進めることになっています。また、この取組を通じて、木材需要地としての都市部との連携、美郷町の関係人口、交流人口の拡大が期待されます。

※鉄道林・・・鉄道会社が鉄道沿線に保有する山林で風雪や落石から線路を守る役割があります。島根県内の旧三江線沿線では主に江津市、川本町、美郷町に合計で約150haありますが廃線後は活用されていませんでした。



趣旨説明〔JR西日本〕



意見交換



フォワーダからトラックへ丸太の積替

線路敷

県央・林業部トピックス（1月号）

シカによる林業被害の調査を実施しました。

中国山地のニホンジカは、高い捕獲圧等により明治末期に姿を消したと考えられていましたが、近年は隣県からの流入により県境の市町において、目撃や捕獲数が増加しています。そこで、循環型林業拠点団地や林業公社収穫事業実施地においてシカの生息状況や被害状況を把握して、被害対策につなげるための林業被害調査が令和5年度から全県でスタートしました。本年度は、循環型林業拠点団地を対象に調査をすることになりました。県央事務所管内では、大田市3か所（富山町地内、三瓶町地内、山口町地内）と邑南町2か所（和田地内、鱒淵地内）の調査地を設定して調査を行いました。大田市三瓶町の造林地ではシカによる被害は確認出来ませんでした。富山町と山口町で「わずかな被害」が確認されました。一方、邑南町では、造林地の「ほぼ全体」でシカによる樹皮剥ぎや主軸、枝葉の食害が確認されました。

大田市では、近年シカが目撃情報が住民から多く寄せられるようになってきました。そのためシカの分布拡大による林業被害の発生を見越して、森林組合がシカ捕獲の新たな担い手となるために大田市、大田市森林組合、県央事務所で時間をかけて体制づくりの検討を重ねてきました。そしてこの度、大田市から大田市森林組合へ業務委託する形でのシカの捕獲がスタートしました。市が森林組合にシカの捕獲を委託することは、県内では初めての取組みであり、今後継続していくための仕組みづくりに取り組んでいく必要があります。



スギの樹皮剥ぎ（三瓶町）



ヒノキの樹皮剥ぎ（富山町）



大田市森林組合のシカ捕獲研修



大田市森林組合のシカ捕獲研修

県央・林業部トピックス（2月号）

ニホンジカのライトセンサス調査を実施しました。

近年、中国山地のニホンジカは、隣県からの分布拡大により県境の市町において、目撃や捕獲数が増加しています。

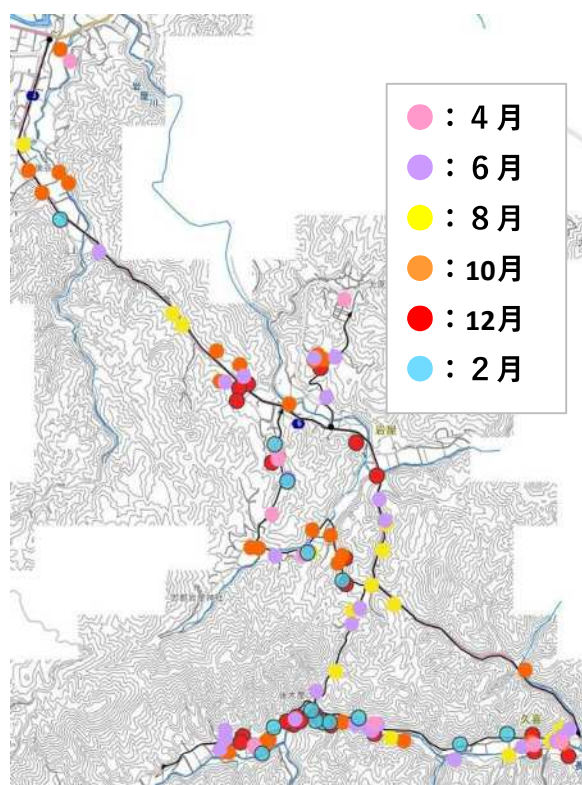
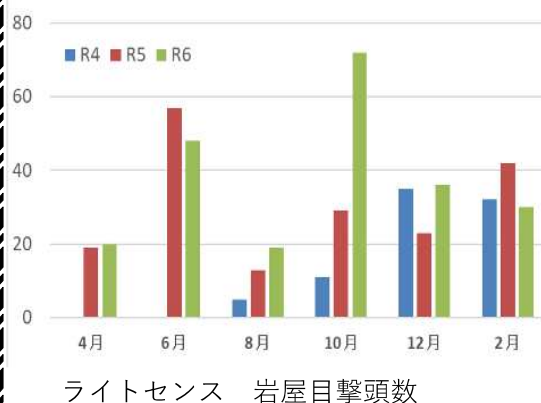
今後、計画的に被害対策を進めていくうえでシカの頭数増減や分布範囲のモニタリングなどが必要です。県央事務所では令和4年8月より邑南町で2ヵ月に一回ライトセンサスによる調査を行っています。

ライトセンサスは、日没後に低速走行の車からスポットライトを照らし、個体確認できたシカの数をカウントします。多くの動物の眼は夜間ライトをあてると反射により眼が光るので遠くにいるシカも見つけることができます。

調査地は広島県境の大草、岩屋および伏谷の3箇所を実施しています。今回、2月の調査では大草で0頭(0頭/km)、岩屋で23頭(2.67頭/km)、伏谷で2頭(0.71頭/km)のシカを確認しました。一方、令和4年度から3年間の調査で一番多く確認されたのは、令和6年度10月の調査で目撃頭数は72頭で増加傾向にあります。

岩屋地域周辺では拠点団地、国有林も含め、主伐・再造林が行われている箇所があり、他地域以上に早急な対策が求められます。

被害対策は防護柵と捕獲の両輪で実施していく必要があります。しかし、岩屋地域をはじめ多くの地域で捕獲者の高齢化が進んでいます。その為にも囲い罠を使用した効率的な捕獲方法の確立や、新たな担い手の確保そしてベテラン捕獲者からの技術の伝承が今後の課題です。



造林地内にいたニホンジカの群れ

令和7年度 岩屋地域のニホンジカ目撃箇所